



風水害から

身を守る

例年、梅雨から秋にかけて、豪雨や台風などの風水害が多く発生するようになります。特に台風は7月から10月にかけて接近、上陸の数が多くなりますが、2019年の台風1号（1月1日発生）や2000年台風23号（12月30日発生）のように、台風は1年を通して発生し、九州南部には5月に接近した例もあります。

2011年の台風1号と2号、2015年の台風6号は、5月に接近し、西日本を中心に大きな被害をもたらしました。

今回は、風水害シーズンを迎える前に、台風に関する知識について再確認しておきたいと思います。

台風とは

熱帯の海上で発生する熱帯低気圧のうち、赤道より北で東経180度より西の領域の北西太平洋、又は南シナ海にあって、最大風速がおよそ17m/s以上のものを台風と呼びます。

台風は、低緯度では西に移動しますが、中・高緯度に達すると、上空の風や周辺の気圧配置などの影響を受けて、複雑な動きになります。また、台風は地球の自転の影響で北々北西へ向かう性質があります。

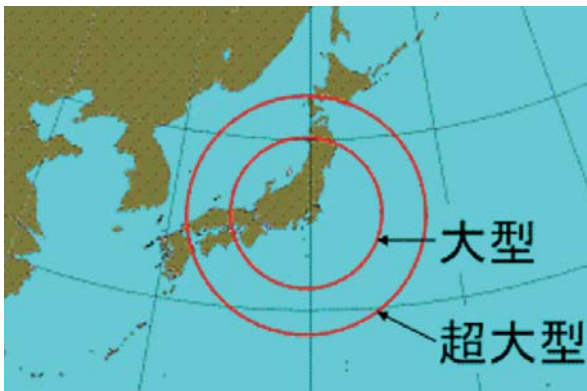


台風の大きさと強さ

台風は、**風速（10分間平均）**をもとに、「大きさ」と「強さ」を表現します。

「大きさ」は強風域の半径で、「強さ」は最大風速で区分されます。強風域とは風速15m/s以上の風が吹いているか、吹く可能性がある範囲をいいます。

さらに、風速25m/s以上の風が吹いているか、吹く可能性がある範囲を暴風域と呼びます。



▲大型、超大型の台風それぞれの大きさを、日本列島の大きさと比較したもの

30年間（1991～2020年）の平均では、年間で約25個の台風が発生し、約12個の台風が日本から300km以内に接近し、約3個が日本に上陸しています。発生・接近・上陸ともに7月から10月にかけて最も多くなりますが、早いときには4月に接近し、6月に上陸しています。

《台風の大きさ》

階級	風速 15m/s以上の半径
大型（大きい）	500 km以上～800 km未満
超大型（非常に大きい）	800 km以上

※強風域の半径が500km未満の場合は、大きさは表現されません。

《台風の強さ》

階級	最大風速
強い	33m/s(64ノット)以上～44m/s(85ノット)未満
非常に強い	44m/s(85ノット)以上～54m/s(105ノット)未満
猛烈な	54m/s(105ノット)以上

※最大風速が33m/s未満の場合は、強さは表現されません。